死んだらヒーローに

blackblack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死んだらヒーローに

【Ｎコード】
Ｎ９５５０Ｍ

【作者名】
ｂｌａｃｋｂｌａｃｋ

【あらすじ】
トラックにはねられた少年が神と名乗る者に出会い…

初めての投稿です！いろいろな漫画パクっていますがよろしくお願いします

主人公死亡（前書き）

初めての投稿です　よろしくお願いします

主人公死亡

（……なんでこ～なっちまったのかなぁ…）

今　俺は道路でうつぶせに倒れている

道路には血だまりがどんどん広がっており、おれの視界はどんどんぼやけてくる

少し目線をずらすと、歩道に中学生ぐらいの女の子がこっちを見て驚いている

「ああ…　そういえばこいつを助けるために…」

ついさっき、俺は歩道を歩いていた

（明日は入学式か…　めんどいな　さぼろうかな）

なんて思いながら　ぼーっと歩いていると

前に女の後ろ姿が目に入った

両方の耳になにかつけているようですぐにイヤホンをつけているのがわかる

それに下を向きながら歩いているので　ちょうどケータイか音楽プレーヤーを操作しているようだ

（あぶねーな…　よくぶつからねーよな…）

なんて思いながら歩いていると、女が歩いている先にある信号が点滅し赤になった

しかし、　女は気づいていないのかそのまま歩き続ける

（おいおいおい…　あぶねーぞ　あいつ）

女が横断歩道にはいったとき、　奥のほうから大型トラックが走ってきた

（！！！　おいおい…　マジでしゃれになんねーぞ！！！！）

気づいたら　俺は全力で走っていた

女まであと１０メートル　しかしトラックは止まる気配がなく　そのまま走っている

女は今気づいたようでトラックの方を見る

しかし、あまりに突然のようで頭が追いついていないようだ

（っ！！　間に合え！！！！）

女とトラックの距離がギリギリになったところで俺は追いつき　思いっきり女を突き飛ばした

しかし　ただでさえ女でギリギリだったのに自分が避ける時間があるはずもなく

ドオォォン！！！

俺ははねられた

俺のまわりに人が集まっている
地面にはすごい量の血がながれている

（ああ…　おれ死ぬのか…）

体の痛みもまったくなく　手足を動かそうとしても動かない

（まあ…　人を助けて死ぬんだったら　まあまあいい死に方だろう）

さっき　突き飛ばした女が俺に近寄ってなにか叫んでいるが　もう
なにも聞こえない

そして俺は死んだ

神さまに出会った

「・・・・・き・・・ろ・・・」

誰かいる…

「・・・お・・・・ろ・・・」

誰か俺を呼んでいる…

「・・おき・・ろ・・ガ・・」

誰だ…？

瞼を少し開いて周りを見てみる

どうやら俺は地面に寝ているみたいだ

しかし、周りをみても黒

今　寝ている地面も黒

上も下も左も右も黒

（どこだ？　ここ）

さっき声が聞こえた方を見てみる

すると…

バンチパーマでグラサンをかけ、あご髭がある　明らかにヤクザと言える生き物がタバコをくわえてこっちを見ていた

じっとそのヤクザを見ていると…

ヤベー…　目が合っちまった…

「おう、くそガキ目が覚めたか」

「・・・・・・」

「・・・・・・・」

沈黙３０秒経過

寝たふり続行

「オイ！！　テメッ　くそガキ！！！　おめー明らかに目が合っただろーが！！！」

合ってない合ってない俺は何もみていない

「い～のかな～？　おじさん奥の手だしちゃうよ？　い～のかな～？」

奥の手？

一体どんなものかと少し瞼を上げて見てみると…

腰の後ろに右手をまわしたと思ったら…

！！拳銃出しやがった！！！

「撃っちゃお～かな～？　おじさん撃っちゃお～かな～？」

どうする？！！　このままだと明らかに撃つ気だ　このヤクザ！

でもこのまま起きてもなにされるかわからない！！

冷や汗だらだらで悩んでいるとヤクザが

「3数える間に起きないとおじさん撃っちゃうからね～」

ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！！！どうするどうするどうする！！！！

「はい　い～～～ち　『ドオォン！！』

「うおぉぉぁぉい！！」

この人　1で撃ってきやがった！！！

「2　と　3　はァァァァ？！！」

「しらねーなそんな数字　男はな　1　だけ覚えときゃ生きていけんだよ」

「あんたが言ったんだろ？！！　3数えるって！！」

「うるせぇぇぇぇい！！もとはといえばおめーがさっさと起きねぇからだろぉが！！」

「いきなり目の前にヤクザがいれば誰だって簡単には起きねぇぇよ！」

「誰だ？？　ヤクザって」

「……え？？　おっさん　ヤクザだろ？？」

指を指しながら言う俺

「失礼しちゃうな～　おじさんはアレだよ　アレ」

「アレ？」

つぎの瞬間、このヤクザとんでもないこと言いやがった！！

「おじさん　神様だよ」

会話（前書き）

文章がこんなに難しいとは…

会話

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙…

また龍一は指を指し確認する

「・・・・・・・神様？」

「神様」

即答するヤクザ

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

再び沈黙…

「うそつけぇぇぇぇぇぇぇ！！」

大声でツッコむ龍一

「あんたが神様なら　そこらへん歩いてる危ねー奴ら全員神様になっちまうじゃねーか！！！！！」

「んだとぉぉぉぉぉ！！このガキ！！この顔か？この顔のこと言ってんのか！！？あぁん」

「そぉぉぉぉだよ！　その顔だよ！　その顔だとヤクザにしか見えねぇぇぇんだよ！！もしくは……やっぱヤクザにしか見えねぇぇよ！

「うるせぇぇぇよ！！　お前この顔持って生まれた俺の気持ちわかんのか？！！わかんねぇぇだろ！！俺だって頑張ったよ！！顔変えるために頑張ったんだよ！！いろいろやったよ！！でも無理だったんだよ！！俺は一生この顔のままなんだよ！！お前なんかにわかってたまるかぁぁぁ！！」

「わかりたくねぇぇぇぇよ！！」

「このくそガキいいいいい！！」

殴り合いが始まって１０分後

「なかなか……はぁ……やるじゃ……はぁ……ねーか……」

「…あんた……はぁ……こそ……」

殴り合いお互いの友情を培った二人

「つーか、あんたが神様なら証拠見せてくれよ」

「まだ信用してねぇのかよ……わかったよ、そこまで言うならみしてやる」

ヤクザは立ち上がって目をつぶって何かブツブツ呟き始めた
しばらくすると　光に包まれて頭の上に光の輪が現れ、真っ白な一対の翼がはえてきた

「どぉぉぉよ　　これが俺の真の姿だ　　ビビったが？チビっちまたか？」

どや顔で聞いてくるヤクザ　　しかし龍一の思った感想は全く違うものだった

「光の輪に白い翼って……それってどっちかっつーと…天使じゃね？」

しかしヤクザは人差し指を前に出し言った

「チッチッチッ　あめーな　おめぇら人間は実際に神である俺を見たことねぇだろ？お前らが勝手に神の想像してるだけだ」

龍一は「なるほど」と納得した

龍一はまだいろいろ質問したかったが一番気になる質問をした

「……ここどこだ」

「天国と地獄の狭間」

即答しやがった

「おれがおめぇを呼んだんだよ」

「なんでだ？」

「いろいろあってな　死んだおめぇの体から魂だけひきづって連れてきた」

（あぁ、そういえばそうだったな…）

龍一は女を助けて死んだことを思い出した

「なんで　俺を連れてきた？」

ヤクザ（神様）は座ってタバコを一服したあと立ち上がり　言った

「おめぇ、ヒーローになってみねぇか？」

会話2（前書き）

やっぱり難しい……

会話2

「ヒーロー？」

「そぉだヒーローだ。やってみねぇか？」

龍一は混乱した
そりゃあそうだ　いきなり黒い空間に連れてこられて、ヤクザ（神様）に拳銃で撃たれ、しかもそのヤクザ（神様）と殴り合いをし、その後にいきなり‘ヒーローにならないか’なんて言われたんだ。混乱しないほうがおかしい

「……なんで俺？」

「そりゃあ　おめぇ　おじさん見てたもん。おめぇが女ぁ助けるために自分の身も省みず助けるの。　おじさん感動しちゃったよ　泣けたよ（泣）」

涙を流す（ふり）を見て、龍一はあのヤクザ（神様）をぶん殴りたくなった

「実はおじさん、世界滅ぼそうと思ってたんだよねぇ」

さらっと　言いやがった！！このヤクザ（神様ｏｒ魔王）

「だってさぁ、人間ってうじゃうじゃいてさ、戦争とかさ訳わからんことばっかでさぁ、おじさんも頑張ったんだよぅ、でもさぁ結局あんま変わんなかったんだよねぇ」

ヤクザはタバコの煙をふぅーっとはき、次は真剣な口調で続けた

「でも、この世界バカな人間だけじゃないってこともわかってる。戦争を止めるために頑張っている人間もいる。関係ないのに戦争に巻き込まれて、必死に生きている人間もいる。そんな奴らもいる世界を滅ぼすなんてこたぁ、おれぁしたくない」

ヤクザは立ち上がり続ける

「そこで考えたんだよ、この世界にメチャクチャ強くてメチャクチャカッコイイヒーローが犯罪者や世界の裏で悪りぃことしている連中をばっさばっさと倒していったら、世界は少しは良くなんのかなぁって」

「……人を殺せっていうのか？」

「そこまでは言ってねぇよ、これは実験みてぇなもんだから　そん

なに気負わなくていい。そこはお前に任せる」
「どうだ？やってみねぇか、ヒーロー？」
龍一は考える
確かにこのまま普通に一生を過ごすより刺激的かもしれない
しかし…
「なあ、やっぱりヒーローって闘うわけだから怪我とかすんだよな？」
「そのへんはだぁいじょうぶぅ！！おじさん、ちゃぁんと考えてるから」
「……本当か？」
「だぁいじょうぶだって！！おじさんの９５％は真実でできています」
……なんか、すごく不安が残る言い方だが…　よし！！
「わかった、ヒーローやってるよ！！」
その言葉聞いてヤクザは　少しだけ微笑んだ

「よ～し、そうと決まれば準備だ！！」

「準備？」

「おうよ！！やっぱヒーローといやぁ最強じゃねぇといけねぇと思うわけよぅ！！というわけで、なにかほしい力はあるか？３つまでなら叶えてやる！」

なるほど、確かに弱いヒーローなんていやだな…
闘うところを想像してみる
相手は犯罪者とか危ない連中になるだろう。刃物や銃、爆弾だってあるかもしれない。だったら相手が攻撃する前に攻撃したい…

「……じゃあ、１つは身体能力強化で」

「それでいいのか？結構つれぇみたいだぞ？」

「なんでだ？」

「人間ってぇのは本当はもっと力があるんだが、脳でブレーキかけてんだよ。そのせいで全体の力の３０％しか使ってねぇんだ」

「マジか？！」

「ああ、マジだ。　だからいきなり力を全開にすると筋肉やら腱やらちぎれて、さらに無理すると死ぬぞ」

「……」

「まあ、徐々に馴らしていけば死ぬこたぁなくなるし、せいぜい筋肉痛ぐらいた。その力使うんなら常時使っとけ。そうすりゃあ体が馴れてくる」

「……わかった、そうするよ」

「わかった、１つは身体能力強化だな。あと２つはどうする？」

龍一は考える。考えたのだか…
結局決められなかった

「今は保留ってことはできないか？必要だと思ったら叶えるってことで」

「ああ構わねぇよ、必要になったら呼んでくれや。」

「……どうやって呼ぶんだよ」

「頭ん中で俺を呼んでくれりゃぁ話せるよ」

「……なんでもありだな」

「神様ですからぁ～」

なんか腹立つなぁ～

「とりあえず力は決まったからぁ……次は戦闘服だな」

「戦闘服？！！」

「やっぱヒーローっていやぁ戦闘服だろ！！仮●ライ●ーとか全身戦闘服で覆って、あれ？誰が闘ってんの、みたいな感じでわかんねぇ～だろ！！」

「そういう例えはやめたほうがいいぞ」

「そうか、すまねぇ。とりあえず2つ戦闘服準備したから、着てみてくれ。つーかこの2つのどちらかにしろ。」

「？なんでだ？」

「おじさんまた作るのいやだからさぁ～」

「！！手作り？！！」

「そうだぞぉ～ありがたく着ろよ～」

（神だからなんでも作れるんじゃねーの？）

そんなことを思いながら戦闘服を着る龍一

…10分後

「おお～、よく似合ってんじゃねぇか。おじさん手作りしたかいがあったわ～うん。」

龍一の着た戦闘服はフード付きで全身を覆い長さが足のすねまである黒いコート

そして白い仮面っていうか髑髏の仮面

最後に柄の長さが2メートルあり、刃が1．5メートルある鎌

「つーかこれ…ヒーローじゃなくて…悪役じゃね？　死神じゃね？」

うん、もうバッチリ死神だった

「こんな格好でヒーローに見えるはずねぇぇぇだろがぁぁぁぁぁぁぁ！！おま、コレ助けられる側からみたら「あれ？悪い奴と悪い奴が闘ってる？あれ？結局おれら助かんねぇんじゃね？」みたいな感じになっちまうぞ（怒）！！」

「そこは優しさでカバーして」

「できるかぁぁぁぁぁぁ！！」

キレ気味にツッコむ龍一

「そんなに嫌だったら、もう1つのほう着てみろやぁ」

「言われなくて……も……」

もう1つをみたとき、龍一はどん引きした
もう1つのほうは、神々しく輝いているのだが……真っ白な全身タイツだった。しかも翼がついてある

「こっちも結構自信さk　「すいませんごめんなさい勘弁してくださいこっちでいいです死神でいいです」

土下座してお願いした

「そ～か？そっちのほうがいいのか？もったいね～な～…」

しぶしぶ片付けるヤクザ

（そんなの着て助けに行ったら変質者じゃねーか！！助けて警察に捕まるなんて笑えねーんだよ！！）

そう思った龍一だが口にはださなかった

会話3（前書き）

グダグダです…

会話3

「じゃあ次は、その戦闘服の説明すっか」

ヤクザは説明し始めた

「おじさん張り切っちゃってさぁ、ありとあらゆる機能つけちゃったわけよぉ。作り出したらもうとまんなくてさぁ」

「例えば？」

「そうだなぁ…、そのコートは防弾・防刃・防爆・防水…だったっけ？」

「…そんだけあれば十分だろ…」

「いやいや、もう1つあったはずなんだがぁ……、もういいやその4つで」

（……アバウト）

呆れる龍一

「でもさぁ、機能付けすぎて制限時間できちまったのよ、そのコート」

「どれぐらいだ？」

「３０分、それ以上使うとただの黒いコートになっちまう。き～つけな」

「……わかった、使うときはさっさと終わらせるよ」

「んで、その鎌は…」

タバコを口にくわえ火をつけるヤクザ

「お前が想像したとうりの武器になる、ただし！！爆弾みたいな複雑なもんや、銃とかボウガンとか遠くを狙う武器にはならないしできない。鎖鎌とか引っ付いてんのはできるが……要するに近距離用武器だな」

「おお～、それはすげーな！！」

素直に感心する龍一
想像するだけであらゆる武器になる道具
そんなものは世界のどこを探してもあるはずがない。そんな道具を自分は使うことができる。そう思うと自然に口元が緩みニヤけてしまう

それを見て、ヤクザは

「うわっキモッ！！」

「ッッ！！　うっせぇぇぇ！！こっちみんな！！」

「最後に、その仮面だな」

髑髏の仮面を指差し説明するヤクザ

「想像どうり、仮面はものすんごく強度がある！！象が踏んでも壊れねぇ！！」

「ふりーよ、何年前の例えだ」

真顔でツッコむ龍一

「しかも、そいつの機能は声を変えることができんだよ！！裏見てみな」

そう言われて仮面の裏、自分が顔をつける側の額部分を見てみると、かなり小さいボタンがいくつかあった。２つのボタンには＋と－のマークがあり、どうやらこのボタンで声の高低を調節するようだしかし、ほかのボタンにはなにもない

「なにもついてないボタンは何なんだ？」

「それはあらかじめ決められたセリフを言うようになってる。押してみな」

まず一番左のボタン

『ぼく、ドラ●もんです（旧）』

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・なぁ」

「んん？」

「これ、どんなとき使うの？」

「場を和ませたいとき」

「和むかぁぁぁぁぁぁぁ！！こんなセリフ使ったら雰囲気ぶち壊しじゃねぇかぁぁぁぁ！！」

「いいじゃねぇか、和んで実力以上の力出せるかもしんねーぞ？それによぉ、これシークレットボイスがあるんだぜ？えーっと……」

何か仮面を操作し始めたヤクザ

「あっこれだ！ほら、聞いてみろ」

ポチッ

『とどめさして逃げてこいよ（ドラ●もん）』

「おいいいいいいい！！ドラ●もんこんなこと言わねぇよ！！いつ使うんだよ、こんなセリフ！！」

「このセリフを使うタイミングは‘友人が妊婦をはねてしまい電話で相談してきたとき’だ」

「言えるかぁぁぁ！！」

「まぁまぁ落ち着けや、次のボタン押してみな」

「またろくでもないセリフじゃねぇだろうな？」

「次はだぁいじょぉぶ！！……（たぶん）ボソ」

「おい……最後なんて言った」

「なんでもねぇって、早く押してみな」

「……」

二番目のボタン
ポチッ

『オッス、オラ小林！！』

「誰だぁぁ小林って！！なに？！なんなの？俺にこれ聞かせてどうしたいの？ねぇ？！！』

『ワクワクすっぞ！！』

「しねぇぇぇよ！！つーかまだ続いてたの？もうツッコむのめんどくせーよ！！早く止めろ！！」

「ちなみにぃ～これがシークレットボイス」

『ギャルのパンティーおくれ！！』

「もぉいいよ！！小林の声聞きたくなぇぇぇよ！！お願いだから早く止めて！！」

音声を止めるヤクザ
ツッコみし過ぎて肩で息をしている龍一

「・・・・・・・」

「・はぁ・・はぁ・・はぁ・・」

「……三番目のボタンは絶対使わねぇほーがいいぞ」

「なん・・でだ・・」

「モノホンの悪魔の声入れちゃった♪」

「聞いたら・・どうなるんだ？」

呼吸も落ち着いてきた龍一
ヤクザは当たり前のように言った

「大音量でこの世のものとは思えない雄叫びがこの仮面から１５メートル以内に響いて、聞いた奴らもれなく廃人になります」

「そんな恐ろしいもん入れんなぁぁぁぁぁぁ！！！」

再びツッコむ龍一
その後　＋－ボタン以外は取り除いてもらおうとしたが、悪魔ボイスは外す途中で鳴り出すかもしれないので外してもらえなかった……（だったら最初から付けんなよ…）

会話４（前書き）

オラに文才をわけてくれ！！！！

会話4

「説明も終わったし、そろそろお前を向こうに帰すわ」

「あっ忘れてた！そーいや俺死んでんだったな」

死んで魂だけヤクザに連れてこられたんだったな俺

「ん～～～、しかしなぁ～お前生き返らせるのに少し問題があんだよな～」

「…？　どんな問題だ？」

「いや～生き返らせるのは簡単なんだよ…、ただ場所がなぁ～」

「…？」

理解してない様子の俺を見て、ヤクザはどこから出したのかテレビのリモコンを出して、ボタンを押した

すると空中？に映像が現れた

映像には道路を走る救急車が映っている
次に救急車の中の映像だ
中には救急隊員2人と血まみれの俺が寝ている
隊員は俺に何か叫んでいる
意識があるか確認しているのだろうか？

「おれぁ、今お前の体を移動させることができねぇ…、だからお前を…」

ヤクザは映像を指差して言った

「あの救急車の中で生き返らせる」

かたまる俺

「……あれぇー、おかしいな？よく聞こえない。もう一回言って？」

「たからぁ、お前をあの中で生き返らせるっつってんだろう？」

「……ふっ……ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁ！！おまっあそこで生き返ったら俺ゾンビ扱いじゃねぇか！！どっか移動させろよ！！」

「いやぁ～あそこから移動させたら、あの隊員2人の目の前からお前の体が消えることになるじゃん？そしたらめんど～なのよぉ」

「だったらあの2人の記憶消せよ！！」

「お前あの2人だけだと思ってんだろ～？それは違うよぉ～　あの2人以外にもはねられたお前の体に群がる人間とかいたじゃん？そいつらお前が救急車に乗せられるの見てんだよ。そいつらの記憶も消すのにどれくらいかかると思ってんの？終わったころにはお前の体腐ってんぞ？」

「…それでもあの2人の前で生き返るのはヤバいって……」

「だぁいじょうぶだって。まだお前の身元の確認とれてねぇみてーだし　今ならまだ間に合うって。　それに作戦もあるし！」

「！！作戦あんの！？最初から言えって！心配したじゃねーか」

ヤクザの話しを聞いて安心した俺。しかしな安心した俺が馬鹿だったヤクザは大きく息を吸って……作戦をいった！！

「とりあえず生き返ったら超逃げて！！」

「……は？」

「だから生き返ったら超逃げるんだよ」

「……それだけ？」

「それだけ」

本気で頭を抱える俺
（マジでこれしかねぇのかよ！！）
このままじゃマジでゾンビと呼ばれちまう
そこにヤクザが話しかけてくる

「だぁいじょうぶだって言ってんだろ？それにお前　力手に入れたじゃん」

あっそういえば身体能力強化できるなったんだった。でも、まだ悩む俺

しかし……時間は迫ってくる

「…おい、ヤベーぞ…　あの2人お前のバッグあさり始めやがった！！身元探る気だ！！」

「ウソ！！」

映像をみると1人の隊員が俺のバッグあさってやがる！！
バッグの中には身元がわかるものは無かったはずだ……ヤベー
そういえば上着の内ポケットの中に学生手帳が入ってる！！どうする
るどうするどうするよ俺！！
……こうなりゃーもうやけくそだ！！

「よっしゃぁぁぁ！やるよ　やってやるよ！！あのなかで生き返っ
てやらぁぁぁぁ！！ゾンビになってやるぅぁぁぁぁあ！！」

「よぉぉぉぉぉし！！ようやく覚悟が決まったか！！そうと決まれ
ばすぐここに座れ！！」

ヤクザが指差した場所に座る俺
今俺は救急車から逃げる手順を頭に叩きこんでいる

（生き返ったらすぐ後ろの扉を威力上げた蹴りで蹴破ってそれから
……）

座って考えていると、額になにか冷たいものが当てられた
目を開けて見てみると
……銃口が突きつけられている

「・・・・・・なにしてんの？」

「お前を生き返らせるんだよ」

「……だからなんで拳銃？」

「こいつをお前の頭にぶち込めば生き返るんだよ。覚悟できたんだろ？」

「俺はゾンビと呼ばれる覚悟ができたんであって撃たれる覚悟じゃ
「おじさん、そ～ゆ～のわかんな～い」

『ドオォン』

「頑張れよ～」

ヤクザ（神様）はそう言って消えた

復活（前書き）

いろいろ漫画パクってます
気ずきますか？

復活

ガバッ！！

「話を聞けぇぇぇぇぇ！！」

勢いよく起き上がる俺
あのヤクザ、マジで撃ちやがった
次会ったらあのグラサン叩き割ってやる！！

（あれ……起き上がる？何で寝てたの俺？）

自分の体を確認してみる
血まみれの服、体を触ってみる
上半身は血まみれなだけで傷もなく痛みもない
下半身も普通に動き、問題ない
ふと…視線を感じたので、顔を上げてみる

「「・・・・・・・」」

男2人がこっち見てる

「・・・・・・・」
「「・・・・・・・」」

長い沈黙

そういや俺生き返ったんだ！！

ドゴォォォォン！！

俺はバッグを持ちすぐ救急車の扉を右足で蹴破った！！

あまりに強く蹴りすぎたせいか、扉は外れそのまま１０メートルほどふっとんだ

しかしそんなのは今の俺には関係ない

俺は救急車から飛び降り着地した・・・と思ったらそのまま転がってしまった

そーいや救急車走ってたんだった…

「「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！」」

数秒遅れて悲鳴が聞こえてきた

……とりあえず家に帰ろう

今の俺は上着の7割が血に染まっている
薄暗くなっているのでたぶん6時ごろ
暗くなってきたので今見られても

「服の柄です」
といえば大丈夫かもしれない

しかし今この姿を誰かに見られたら確実に通報される！！

幸いにもここはまだ住宅街で　人もいない

つまりだれも俺を見ていない

家まで距離は結構あるが、身体能力強化で脚力を上げることができるから１０分で着く

見られるわけにはいかない！！

俺は走り始めた

全力で走っているのでやはり疲れるが、スピードはかなり速い

さすがに人を見かけたときには止まり、いなくなってから進んだが…

家への一番の近道を走る！！

路地裏に入り、自宅のマンションが見えてきた

（ラスト１００メートル！！）

あともう少しというところで人影が３つ見えた

１人は壁際に立ち、２人は道の真ん中に立っている

俺は全力で走り、体力も限界で声をかけるのもめんどくさかったので、道の真ん中にいる２人に

「どけぇぇぇぇぇ！！」

ドゴン！！

「ガハッ！！」
「グピァッ！！」

両足で跳び膝蹴りをくらわしてやった

そままの勢いでマンションに一直線に走る

「・・・・・あの！！・・・」

なにか後ろで声がしたが、もう俺は止まらない

なんとか3階にある自宅に着くことができた……

能力を使い続けたので全身が悲鳴を上げている

すぐに風呂でシャワーを浴び、血と汗を洗い流した

ベッドに倒れこむと　睡魔が襲ってきた意識は沈んでいった……

「・・・・お・・ろ・・」

誰か呼んでる

「・・・お　・・き・」

……誰だ？……つーか前にもあったぞ？この展開…

「起きないと撃っちゃ「起きてる！！起きてるから撃つな！！」

また拳銃構えてやがる、このヤクザ…

「まだなんか用があんのか？おっさん」

（夢にまで出てくんなよ……）

「おうよ！渡し忘れたもんがあってなぁ～、ほら」

ヤクザがなにか投げてきた
見てみると、……ネックレスだ
ネックレスには指輪が３つ通っている
１つ目は髑髏の指輪
２つ目は鎌の刃の先端と、持つところの先端が引っ付いたような指輪
３つ目は黒い指輪だ

「言わなくてもわかんだろぉ？それぞれの道具を指輪にしたんだ。使いたいときに触れば勝手に装備すっからよぉ。まぁ、うまく使えや」

「ああ、ありがとう」（趣味悪）ボソ…

「なんか言ったか？」
カチャッ

「言ってない！！言ってないから銃こっち向けんな！！」

なんかブツブツ言いながら拳銃をしまうヤクザ

「ほら、もう1つ」

また投げてきた
今度のは楕円形で平べったい

表には緑色の画面があり、縦と横に5本の線が入っている……
裏は髑髏だ……

「これってドラゴンレグギャァァ！！」

言う前に蹴られた

「へんなこと言うんじゃねぇよ！！それは悪意レーダーだ！！」

「てめェ　俺が言い切る前に蹴り入れたってことは　自分でもわかってんじゃねえか！！」

構わず続けるヤクザ

「黄色い点が犯罪一歩手前で、赤い点が犯罪真っ最中だ。その髑髏が叫んで教えてくれる」

「クラスの奴にバレるじゃねーか」

「だいじょおぶ、お前にしか聞こえないから」

渡された道具を見てみる

（レーダー以外ヒーローの道具じゃねえよ……）

「あ！！そのレーダーの髑髏噛むぞ」

「Σなんで？」

「んじゃあ、お前起こすわ。もう朝だし」

「はあ！？もう朝？　全然寝た気しねーよ！！」

「いいじゃん、もう。光陰矢の如しってゆうじゃん」

「ふざけ「バイバ～～イ」

『ドオォン』

入学式（前書き）

大変だ……

入学式

ガバッ！！

「だから聞けぇぇぇぇぇぇ！！」

また勢いよく起き上がる俺
周りをみると　俺の部屋だ

（あのクソヤクザ……）

思っていたよりも疲れはなくベットから降り立ち上がろうとすると

ビキッ

「ぬおぉぉぉあぁぁぁぁ！！」

足に凄まじい筋肉痛が襲ってきた
特に救急車の扉を蹴破った右足はかなり痛い

「能力使うとこんなにいてーのかよ？！今度から加減考えねーと…」

とりあえず朝食を食べるために台所に向かった

俺、　姫山　龍一には親はいない
中学2年のときに、両親は酔っ払いの運転する車にはねられて死んだ
中学を卒業するまでは母方の両親に世話になっていたが、高校から
はマンションで一人暮らししている。

祖母が用意してくれたものだ。両親が死んで俺は喧嘩三昧でこれ以
上迷惑をかけないために祖母に頼んだ。両親の死亡保険金のおかげ
で一生とは言えないが大学を卒業して、しばらくは暮らせるくらい
の金がある（大学に行くかわからないが…）

一人暮らしなので　たいがいのことは自分でできる

今日もパンを食いながらテレビをつけた

『……次のニュースです。昨日午後４時頃、トラックにはねられた男子高校生を搬送していた救急車が電柱にぶつかる事故がありました。幸いにも怪我人は出ず、救急車に乗っていた救急隊員３人は軽傷だということです。しかし、男子高校生は見つかっておらず、隊員の２人は「死人が生き返った」と話しているということです。警察は……』

（悪いことしたかなぁ～……まあ、死人が出たわけじゃないし…）

なんて思いながら時計を見て

（そろそろ出るか……）

とりあえず学校に行くことにした

道を歩いていると後ろから声が聞こえきた

「お～～～い、リュウ～～～」

「おう、トラ」

小学校からの腐れ縁の雲野　虎太郎(うんのこたろう)が走ってきた

「昨日帰ったあと　なにかしたか？」

「いや、買い物してずっと家にいたよ」
（……一度死んだなんて言えねーよ）

「リュウは今朝のニュース見たか？近所であったの」

「ああ、見たよ。救急車が事故ったのだろう？」

「そう！！しかも運ばれてた男子高校生の死体が消えたらしいな！！なんかおもしろくないか！！」

「どうせ、探すの下手で見つかってないだけだって。その内見つかるよ」

「チッチッチ、俺……すごい情報手に入れたんだ」ヒソヒソ

「情報？」

「ああ！！なんと事故現場から近いところで、赤い服着てすごい速さで走る人を見たんだってよ！！これ、すごくないか」

「……ただの見間違いじゃねえのか？」

「そうかもしんないけど　そいつが男子高校生かもしんないじゃん！！赤い服は本当はち血かもしれないし！！」

（見られてたか……注意してたんだが……しかし、こいつ情報早すぎるじゃね？）

そのあとは他愛のない話をして学校に着いた

俺達が通う立神（たつがみ）高校は外から見れば１つの学校だが、中身は２つに

分けられている

１つクラスが３０人で、それが６クラスあり、３学年あるので５４０人だ

しかし　クラス分けがおかしい

４・５・６組は一般の生徒だが、１・２・３組には令嬢や御曹子……つまり金持ちの娘、息子がいる

なので１・２・３組と問題を起こすと面倒なことになる。
理不尽な理由をつけられて学校を辞めさせられたやつもいる

４・５・６組の奴で自分から金持ちに話しかける奴はいない

教室に着くとトラは今朝のニュースをクラスの奴ら話し始めた

俺は窓際一番後ろの席に座りトラを見てみる

トラはとても明るくクラスのムードメーカーだ、たぶんクラスの奴であいつのことが嫌いな奴はいないだろう

それに比べて俺は中学まで喧嘩三昧だったので、クラスの奴らは俺を怖がっている

トラとあいつを除いては……

「おい、姫山龍一！！」

きたよ、うるせーやつが

「ああ？」

声のするほうを見てみるとクラス委員長の吹越　澪　（ふきこしみお）がいた

「なんだその格好は！！しっかり着ろ！！今日は入学式だぞ！！あんた、みんなに迷惑かけるつもり？」

自分の格好を見てみる
ネクタイはゆるみ第一ボタンは開きズボンからシャツが出ている

（確かに入学式に出れる格好じゃねーな……）

「わかった、直すからちょっと黙ってくれ」

「さっさとなお『ピ～ンポ～ンパ～ンポ～ン』

放送がなり始めた

『入学式を行います。生徒の皆さんは体育に入り、準備をしてください』

「あ～、急がないと遅れちゃう　早く行かなきゃ～」（棒読み）

「あ！！待ちなさいよ！！」

俺は無視して体育館に向かった

体育館は金持ちから援助してもらっているからなのか、結構デカい

生徒、保護者、新入生が入ってもまだ余る

まあ　令嬢や御曹子の入学式をとるためにテレビ取材やカメラマン、報道陣がいるから丁度いいぐらいになるけど……

新入生が歩く道の左側に金持ち達が座り
右側に一般生徒が座る

そして後ろの方に保護者とカメラマン、２階にもカメラとテレビカメラがある

『新入生、入場』

新入生が入場し始めた

まず入場するのは４・５・６組、つまり一般生徒だ。初々しさが残っていたので入学式らしかったが、１・２・３組の入場では初々し

さは全くなかった。どいつもこいつもあまりに堂々とし過ぎて（こいつら数ヶ月前本当に中学生だったのか？）と思ってしまう

ふと……ひとりの生徒が目に入った
1年3組の女子生徒だ

（……あれ？　どっかで見たことあるな……、誰だっけ？）

じーーっと見てみる

（最近見たような……あ！！！あいつ昨日の！！）

昨日トラックにはねられてときの事を思い出す

（昨日助けたやつじゃねーか…ここに入学したのか。しかしヤバいな……）

昨日のあの大事故の次の日に、俺は怪我も治り普通に学校に来ている。普通なら有り得ないことだ。なので……

（話しかけてきても、他人のふりだな……）

そう決めた

頭のかわいそうな校長の長ったらしい話を聞いた後、生徒会長の話が始まった

生徒会長の神宮寺（じんぐうじ）　雅（みやび）かなりの美人でこの立神高校一番の金持ちで有名だが、性格が最悪なのでも有名だ。

肩がかすった程度で相手に罵声を浴びせ、ひどい時には学校を辞めるまで追い込む。だからあいつが歩く時には一般生徒、金持ち関係なく壁に寄って目の前を通り過ぎるのを待つ。だからあいつの周りには生徒も教師も近寄らない

俺があいつについて思ったことは

（……かわいそうな奴だな）

だった

入学式も終わり金持ち共は教室に戻っていった。入り口のところにカメラマンや取材陣がいるところをみると、まだ数人ほど残っているようだ

俺ら一般生徒は入学式の片付けだ……

何なんだろうな、この扱い……

また入り口を見てみると1人の女子生徒がこっちに歩いて来る
歩き方からして金持ち組のようだ
俺らとは明らかに歩き方が違う

（何しに来たんだ？まあ、俺には関係ないが）

俺は椅子運びを再開した

しばらくすると何か周りから視線を感じる

顔を上げる…と

クラスの奴ら全員……だけじゃなく体育館で片付けしている全員が俺を見ている

トラと吹越がなにかジェスチャーしていて、俺の後ろを指差している

（・・・・・・？）

俺は後ろを向いた

さっきの歩いてた金持ちがいた

「Σうぬあ！！」

ヤベ変な声出しちまった

「すっすみません！！驚かせてしまい……ましたか？」

「いっいや……」

驚くに　決まってんだろ！！俺と接点のない金持ちが後ろに立ってんだから

「な……何かようか、じゃなくて用ですか？……」

「きっ昨日のお礼を言いにきました。昨日は危ないところを助けて頂きありがとうございました！！」

かなりの大声で言った

「……はぁ？？」

俺は昨日確かに人は助けたが、こいつじゃない

「あのぉ……人違いじゃ……」

「い……いえ、確かにあなたでした。昨日、路地で2人の怖い人に絡まれているところをあなたが助けてくれて……」

（昨日の路地裏のは、こいつが絡まれているところだったのか……）

昨日の跳び膝蹴りを思い出す
あの速さで薄暗いところにいた俺の顔が見えたのか？
目、良すぎだろ！！

「あのままだったら、私何をされていたかわかりません。本当にありがとうございました！！何かお礼をしたいのですが……」

頭を下げてお礼をしてくる

「別にいいよ。ただ邪魔だったから蹴っ飛ばしただけだ。あんたにだって気づいてなかったし」

「ですが……」

「だからいいって！お礼なんて。あと、俺に話しかけねぇほうがいいぞ。俺評判悪いから、あんたも変な目で見られる」

「え……」

「じゃあな」

俺は駆け足で体育館から出た
まだ片付けが残ってたけど……

（また吹越にどやされる……はぁ…）

ため息をついて教室に戻った

VS　不良（前書き）

そんなこんなで、ＰＶ６００突破
ありがとうございます

VS　不良

教室に戻ってきたが、途中で片付けから抜け出してきたので俺1人だ

（どうすっかな……）

いろいろ考えてみたら、ふと思いついた

（髑髏の仮面の声の高低、調節しねーとな……）

バックからネックレスを出し、髑髏の指輪を触ったら、本当に仮面になった

まじまじ見てみると本当にリアルだ

（こんなの被ってたら、誰も助けにきたなんて思わねえよな……）

とりあえず仮面の裏のボタンで調節し始めた
＋ボタンを連打して喋ってみる

「『助けに来たぞ』」（おし●●ジリ虫調）

ヒーローでも悪役の声でもない
どんどん下げてみる

「『助けにきたぞ』」（ミッキーマ●ス調

「『助けに来たぞ』」（自分の声）

「『助けに来たぞ』」（ケン●ロウ調）

いろいろやってみたが調節するのがダルくなってきたので一ボタンを連打しまくって、映像をスロー再生した時の声にした

……ますます悪役みたいになった

そうこうしてるうちにクラスの奴らが戻ってきた

すぐに指輪に戻し、バックに戻した

トラが話し掛けてくる

「リュウ！！さっきあの子と何を話したんだ？！あの子、今年の１年の中じゃかなりかわいいぞ！！確か名前は……そうだ鶴本彩華（つるもとさいか）だ！！３組の」

「なんで名前知ってんだ？！！」

「あの子だけじゃなくて全校生徒の女子の名前と顔、全部覚えたぞ！！」

「お前……ストーカーして調べたんじゃないよな？……」

「人聞きの悪いこというな！！人とか噂とかでだいたいわかるんだよ！！」

（なんでそれで顔と名前が分かるんだよ……）

あまりの詳しさに呆れる

「そんで、何の話だったんだ？」

「別に…、なんか知らないうちに助けてたみたいだ」

「よかったじゃねーか！！これがきっかけであのお嬢様と付き合えるかもしれーぞ！！」

「馬鹿言え、３組だろ？もう会うことねーよ」

「あの子わざわざ自分からお礼言いに来たんだろ？結局お前、あの子から逃げたみてーだし。またお前に言いに来るって！！」

「……」

トラと話していると吹越が入ってきた

「姫山龍一！！あんた何勝手にサボってるよ！！」

「いや……あれは……」

「問答無用！！あんた今日1人残って教室の掃除！！」

「え……マジで……」

「マジよ！！」

「……はぁ……」

本日二度目のため息

入学式が終わったら2、3年生は帰るだけだ。だから2、3年生の校舎には誰も残らない
その校舎で俺は1人で教室の掃除
普通7、8人でやることを1人でやるのでかなり時間がかかった

「……やっと終わった…」

「あら、思ってたより早く終わったわね」

廊下から吹越が入ってきた

「……お前がやらせたんだろうが」

「サボったあんたが悪いんでしょ。それにあんた、またサボって帰ると思ってたから意外だったわ」

「……俺がサボったら、お前が1人でやってたろ」

吹越が驚いた顔でこっちを向いた

「……どうして、そう思ったの」

「いつもお前から注意されてたら、お前が真面目だってことイヤでもわかるよ」

なぜか吹越の顔が赤くなっている

「……きっ今日はもう帰っていいわよ／／／／」

「お前はどうすんだ？」

「私はまだやることがあるのよ。だからあんたは早く帰りなさい！！」

「……わかった、あんま無理すんなよ。じゃあな」

バックを持って吹越の横を通るとき、まだあいつの顔は赤かった

自宅に帰り着いて時計を見てみると、もう5時だった。

（吹越の奴、なにが早く終わっただ。かなり時間かかってるじゃねぇか！！）

掃除の疲れと、足の筋肉痛で買い物に行く気にならない

（今日はインスタントだな……）

夕食を食べ終わった頃には、7時になっていた
インスタントだったので時間もかからなかった

（風呂に入るか……）

風呂場に行って、準備しようとしたとき

「うぎゃぁぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁ」

Σ「うをっ」

すぐに部屋に戻って、声のするほうに近づいてみると、あの髑髏レーダーが鳴っていた

「……来たか」

俺はすぐネックレスから髑髏の指輪と黒い指輪を触り、仮面を被り、黒いコートを着た

鎌の指輪は鎌にすると邪魔になりそうだったので、指輪のままにして指にはめた

玄関から出て誰かに見られるのはまずいので、窓から外に飛び出すことにした

飛び出す前に鏡で自分の姿を確認してみる

（……やっぱ、ヒーローには見えねーな……）

俺は窓から飛び出した

吹越澪は薄暗い道を歩いていた
クラス委員の仕事が思っていたより時間がかかり、遅くなってしまったのだ

（……あいつが変なコト言うから…）

龍一からの意外な気遣いのせいで吹越は仕事が進まなかった
終わった頃には外は薄暗く慌てて学校を出た

今、吹越は　住宅街の公園の近くを歩いる
電柱の上についている街灯が道を照らしている。周りに人は1人も居ない

（……気味が悪いわね…）

そう思っている吹越の後ろから人が近づいてくる
3人の男だ
気づかれないように足音をたてず　、近寄っていく

そして。1人の男が吹越の口を抑えた

（えっ！！）

吹越は状況が理解できなかった
理解できないうちに残りの2人は吹越の体を抑える
あっという間に口にガムテープを巻かれた

「おお！！いい女じゃねぇか！！」

「今日は楽しめるな！！」

吹越は直感でわかった

（このままじゃ、なにされるかわからない！！！）

吹越は激しく体を動かし、暴れた

「ん～～～～！！ん～～～！！」

「うるせぇ！！！じっとしてろ！！」

ドゴ！

「ん！！！！！」

腹を殴られた
吹越はそれから逃げるのを諦めた

「そーだよ、じっとしてりゃいいだよ」

「やさしくしてやるからさ！！ギャハハハハハハ！！！」

「おい、あそこに連れて行くぞ」

吹越は近くにある公園に引きずられていった

公園は薄暗く人気がない

助けてを呼んでもきそうにない

公園にあるトイレの裏にまで引きずられた

吹越の顔は明らかに怯えていて、目からは涙を流していた

（誰か助けて助けて助けて助けて助けて嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ）

しかし、誰も来る気配がない

「誰が最初？？」

「おっ！！じゃ、俺が一番♪」

男は吹越の襟首を掴み、服を引き裂いた

（誰か……助けて……）

男の1人が吹越の胸に触れかけた、そのとき…

ドゴ！！

「ゴハッ」

男が吹っ飛んでいった

「「！！！！！」」

吹っ飛んだ男意外の全員が声が出なかった

男の1人を吹っ飛ばしたのは、全身真っ黒でフードを被り、フードの奥には髑髏が見える

……死神だった

「なんだ、テメェ……」

「……」

男が言っても死神は答えない

さっき吹っ飛んだ男が立ち上がり

「なにやってんだ！！！さっさと殺せ！！」

それを合図に男達は懐からナイフを出し、死神に襲いかかった

しかし、そこからはあっという間だった

1人がナイフを突き立てて突っ込んだ

死神はそれを回転しながら避け、その勢いのまま男の顔面に裏拳を叩き込んだ

しかし男はその場に倒れるのではなく、5メートルぐらい吹っ飛ぶ

もう1人はナイフを右から左に振ったが、死神はしゃがんで難なく
避け、男の顎にアッパーを当てた
男は上に3メートルほど飛び、地面に叩きつけられた

「……なんなんだ、お前……」

「……」

男が話し掛ける
しかし、死神は喋らない

「…何なんだって聞いてんだろぉぉぉがぁぁぁぁぁぁ！！」

男は叫びながら右手を首の後ろにもっていった
すると、金属がこすれる音がして、長さ７０センチほどの大振りの
刃物を向けてきた
背中に仕込んでいたのだろうか

「『……お前、それ使うのか？』」

死神が始めて喋った、その声はとても低く、映像をスロー再生した
ときのような声だ

「だったら何だってんだ？！！」

「『……俺も使わせてもらう』」

死神は右手の指を触った
すると死神の左手に鎌が現れた

死神にふさわしい大振りの鎌

死神は鎌を両手に持ち、相手に突っ込むように足を構え、鎌を横に構えた

「……ひぃ！！」

男は武器を捨て、後ろに全力疾走で走った

（こっ殺される！！！）

男は走った、全力で、前だけを見て必死に走った

しかし

「『逃がすと思うか？』」

頭のすぐ後ろであの声がした

すぐに後ろを振り向く

どアップで髑髏が見えた

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

男は叫んだか、もう遅い

死神は鎌の刃の反対側を男の横腹に叩きつけ、振り抜いた

男はそのまま２０メートル吹っ飛んび、地面に転がった。そのまま

男は動かなかった

吹越は今の光景を見ていた
男3人が死神に倒された

（私は、助かったのかな？……）

そう思っていたら死神が近づいてきた

「ひぃ！！」
（殺される！！）

吹越は目をつぶった
足音がどんどん近づいくる
そして、自分の前で止まった

死神は言った

「『携帯』」

「えっ？！」

「『警察に通報しろ』」

吹越は驚いた。死神が思ってもみないことを言ったからだ

吹越は言われた通りに、警察に電話をかけ、ここに来てもらう言った

「……」

「『……』」

警察が来るまでの間、死神は吹越の隣に立ち続けていた

やがてパトカーの音が聞こえてきたときに死神が吹越に話しかけた

「『もう、大丈夫か？』」

「え…ええ……大丈夫よ」

嘘だった。さっきの恐怖はまだ完全に消えていない。ただの強がりだ

「『……そうか』」

死神は吹越に近づいた

吹越は下を向いている。怖くて顔を上げられないからだ。そして、吹越は頭に何か置かれたことに気づく。

手だ、私の頭を撫でている

そして死神は言った

「『あんま、無理すんなよ』」

「え？」

顔を上げた時には死神は走り出していた
そして、地面を蹴り、電柱や、家の壁、屋根などを乗り移りながら
夜の闇に消えていった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9550m/

死んだらヒーローに

2010年11月17日02時47分発行